Domostrojの 言 語

── コンシン所蔵写本による言語的特徴の研究より ──

三　谷　恵　子

1.0本稿は,文献＜Domostroj ＞について筆者が作成した研究論文の一部である。

1.1文献の輪郭

<Domostroj>(日本では「家庭訓」という題で紹介されている）は16世紀中期のロシア語文献である。この文献は，世俗に生きる人々が,正教徒として，皇帝の下僕として,また家庭生活を運営するにあたっていかにあるべきかを説いた一種の規範集だが，その記述は抽象的な理想論の展開ではなく，当時の実生活に密着した具体的なものである。従って,用いられている言語も<Domostroj>の写本研究の第一人者であるA.C. Орлов が指摘するように，当時の民衆の口語要素を含む，実用性，簡潔性に秀でた言語となっている。「ここでは，その言語的特徴を語彙，文法面から採り，」文献が成立した16世紀の実用文献の言語の特徴を知る手がかりとしたい。

<Domostroj>の写本は32ないし33あるとされているが,「文献自体が16世紀以前にロシア各地，特にモスクワ及びノヴゴロドにあった説教集や実用文献の編纂本であるという性格をもつため，その編集の型により３つのグループに大別される。 その第一は本塙で扱うコンシン所蔵写本を含む，全64から成るもの。第二は第一のものに比べ全体にかなり長いが,終章の64章を持たないもの。第三はこの両者の混合型である。

これらの中で第一のグループに属するコンシン所蔵写本についてОрловが同じグループに属する他の４写本との比較の上に校訂を行ったものが<Домострой по коншинскому списку и подобиымъ. чтение ОИДР 1908. кн. 2> である。本稿ではこのОрлов校訂によるコンシン所蔵写本をテキストと定める。従って以下単に <Domostroj(＜D＞と略）＞と記す場合には直接にはこのテキストをさすこととする。

1.2＜D＞の構成

＜D＞では現実生活に密着した様々な教えが説かれているが，各章の内容と見ると文献全体がいくつかの部分に分けられることがわかる。最も大きくとらえるとテキスト前半部には良き正教徒として，また皇帝や公権力の下僕としてのあり方，家人や近隣の人々に対する態度についての教えが述べられ，ことに教会や聖職者に対する配慮は再々に渡り説かれている。これに対しテキスト後半は家庭生活を運営する上に必要な教え，即ち召使いへの心遣い，食料の保存法，道具の扱い，酒の造り方から家畜の世話に至る事柄が詳細に渡って記述されている。

ところで＜D＞の終章である64章は，他の63章が各々１ページ前後の短い独立した章であるのに比べ約９ページと長く，また他の章が一般の読者を想定して書かれているのに対しこの章のみは「父から子への書信と教え」と題され，父から息子への直接の呼びかけの形をとっている。それゆえこの章のみ前の部分から独立して存在した文献であるかの如き印象を与える。一読すれば,しかし，テキスト前出部と重複する表現や同様の内容が数ケ所見られ，＜D＞全体の総括的性格の章であることがわかる。この章の冒頭に，一般に＜D＞の作者とされている司祭シルベストルСильвестръの名が記されている。彼は＜D＞を今日あるような形に編集し，さらにこれをまとめ，自らの体験とあわせて「息子への書信と教え」 という形で終章を付したのであろうと考えられている。 シルヴェストルは

ノヴゴロド出身の受胎告知教会の司祭で，16世紀の50年代，若き皇帝イワン４世に多大な影響を与えたが，60年代には地位を失い，中央から姿を消している。　彼についてはいくつかの研究があるが，本稿では言及を省略する。

先に述べたように＜Ｄ＞は全体を大きく三部に分けることが可能である。即ち全64章のうち終章を除く63章の前半部と後半部，そして第64章である。そして各々の内容的相異は言語面にも必ずや反映しているであろうから，この三部を互いに比較することにより，古い文語要素の保たれ方，新しい口語要素のとり込まれ状態について何らかの特長が得られることが予想される。そこでこの三者の比較により論文を進めていくこととする。文献の内部比較を容易にするため，便宜的に各部の境界を定めることが必要であろう。最後の64章はこの章のみで独立させることが可能であるため問題はないが，前63章をどこで二つに分けるか。 Соколова はその研究論文 <Очерки по языку деловых памятников XVI века, 1957. Ленинград>において25章と26章の間に境界をおいている。これはいくつかの理由から考えて妥当なものと判断される。

まず第一に25章から28章辺りを境に記述の内容が変わっていること,また 24 章が「不正なる人生について」25章が「正しき人生について」と題されて対になり，前20余章の内容のまとめとなっていること，最後に26章以降に見られる語彙特徴が25章以前のものと異なっていること。例えば26章に用いられている смѣѧ （смѣтити の能動形動詞現在単語尾形），смечаｔ，ѡБиходе（ѡбиходｔ前置格），приходъ，росходъ といった語彙はいずれも26章以降ではしばしば用いられるのに対し25章以前では一度も現われない。このような理由から便宜上25章と26章の間に境界をおき，第１章より25章を前一部，26章から63章を第二部として，各部の言語的特徴に注目する。

2.0．語彙の特長

＜D＞にどのような語彙が用いられているかについての詳細な検討は紙面の都合上省略し，ここでは＜Ｄ＞の語彙の特長に関し以下の数点を記す.

１.テキスト全体から言えることは語彙が多岐にわたっている，ということで教会用語から日常用語，時に方言要素と思われるものまでを含んでいる。

２．第一部では教会用語（例えば聖職名，祈禱の名称）の使用が目立つ。これは内容から考えて当然のことであるが，例えば聖餐にあずかる方法に関した第３章の箇所では，これらの教会用語と並んで сверкати (гѹбами)，чавкати (ртомъ)，плюскатｉ (гѹбами)といったきわめて口語的語彙が用いられており，内容が宗教的教訓に関したものであっても,その語彙は伝統的な教会用語の粋を越えて，広く口語あるいは方言の領域にも及んでいることをうかがわせる。

３.＜D＞第一部は再三述べるように聖職者による説教集的色彩が強く，このため благодарение，благословение，грѣхъ，добродетель といった，宗教的色彩の強い抽象名詞がしばしば用いられる。これらの語彙はいずれも第二部では全く用いられないか，唯かに一，二度用いられるのみである。また人々に戒めを与えるに際し，具体的に魔術妖術の名称を列挙したり，様々な病名を並べた箇所もみられる。このように様々な名称の列挙は＜Ｄ＞全体にみられる傾向で，＜Ｄ＞の語彙の領域を広げると同時に，文献が非常に具体性に富んだものであるという印象を強めている。

４.第二部の最も著しい語彙的特長は，日常生活に用いられる用語の多種多様さであろう。とくに第二部後半では様々な食物，用具，動物名，倉や建物に関する名称が豊富に用いられている。

これらの中には Никифоров が北方ロシア方言と指摘する語彙が含まれている。(сꙋщь, хохолки, крошнѧ, сеница, порѧднѧなど。(Никифоров, Из наблюдения над языком "Домостроя". 1947, стр. 25-26)

5 第二部では指小形を多く認めることができる (огородъ-огородецъ, медъ-медокъ, каша-кашка; чисто-чистенко) これは非常に口語的表現であるとされている。(Никифоров, 前出書 стр. 19)

6.64章の語彙は第一部と重複するものが多い。しかしこの章には前二部には現われない, 商業に関係した用語 (розласка, доимати, пересрочити など) がある。

Сильвестръが自ら工房を持ち, イコンや各種の手工業品を作らせ外国と商売をしていた経歴を反映したものであろう。

以上<D>の語彙は各部にかなり明確な特長を有しながら, 全体には豊富で広範囲にわたるものと言うことができる。

3.0. 形態的特長

形態的特長は文献研究の上で最も興味深い点といえようが, 本稿ではその全てを記述することはできないので, 最も明らかに特長のとらえやすい名詞の変化について調べることにする。

3.1. 変化表の作成方法

名詞がどのような変化をするかを簡潔に示すため, 変化表を作成する。基本的にこの変化表は<D>に用いられている名詞の変化形をもとに作成し, 古代ロシア語の標準的な名詞変化型の分類に従い, 各々の変化型に属した名詞が<D>中ではどう変化するかを見る。

各変化表をできる限りテキストに忠実に再現するため, 次のように定める。

①各変化形の代表語として, 文献中に二通り以上の変化形で登場する語を選び, 該当する格のカテゴリーに属する変化形がある場合にはその全ての形を表に入れる。

②代表語において, ある格の形が文献中になく, 同じ変化形に属する他の語で該当する格の形が用いれている場合にはその形に合わせて代表語を変化させ, △印を付して表に入れる。

③該当する格の形が代表語になく, 他の語にも対応する変化形がないか, 不明確な場合, パラダイムの前後関係から類推可能なものについてはその類推形を(△)で示す。

上の②, ③の方法でパラダイムの空白を埋める時, 二つ以上の形があり得る場合には原則として優勢な形に合わせる。

④上の方法で空白を埋められない場合にはそのまま空白とする。

以上のような手順で作成した変化表が次に挙げる表1～4である。

3.2 変化表に関する留意点

<表1, 2>男性名詞－O型, -ŭ型及び－i型について。

〔Ng.sg〕－O変化型では－a, -я が大半を占める。 -ŭ 変化型の語尾 -у, -ю は元来 -ŭ 変化型に属した名詞(домъ, грѣхъ, ледъ, миръ, чинъ 等) にみられるのみでなく, －O変化型名詞にも及んでいる。 (советꙋ)。-у, -ю 語尾は数の上では第二部に多く,〔Ng〕が否定生格になる時, [prep. + Ng] (из домꙋ, ѡ морозꙋ)の形をとる場合及び若干の数量生格的用法において多く見られる。-ŭ 変化型に属した сынъ, あるいは－i 変化型の гость などは－O変化型の語尾をもって現われている。

〔 表 1 〕

		-ŭ 変化型		-ĭ 変化型	
Sg	Nn	сынъ	домъ	гость	тать
	Ng	сына	домꙋ	гостѧ	Δтати
	Nd	сынꙋ	[домꙋ домови	гостю	Δтати
	Na	Ng と同形	домъ	Ng 又は Nn と同形	(ΔNg又は Nn と同形)
	Ni	(Δсыномъ)	Δдомомъ	Δгостемъ	Δтатемъ
	Nl	(Δсынѣ)	домꙋ	гости	Δтати
pl	Nn	Δсынове	Δдомы	гости	[тати татие
	Ng	сыновъ	Δдомовъ	гостей	татеи
	Nd	сынове	Δдомомъ	гостемъ	(Δтатемъ)
	Na	сыновъ	Δдомы	Ng 又は Nn と同形	(ΔNg 又は Nn と同形)
	Ni	сыны	[домами Δдомы	гостьѧми	(Δтатьми)
	Nl		Δдомѣхъ	[гостехъ гостѧхъ	(Δтатехъ)

[Nd,sg] -у，-ю が大勢を占める。-ŭ 変化型の語尾 -ови(еви) は第一部で3回(домови, господеви, мꙋжеви)，64章に1回(Богови)のみ見られる。
домъを除く3語はいずれも-ŭ 変化型に属する名詞ではない。

[Na, sg] 不活動体名詞は主格と同形，活動体名詞は生格と同形の対格が全体にほぼ定着している。第二部で гость が про гостьという前置詞との結合形で9回用いられているのを例外とする。

[Nl, sg] -o 変化型硬変化で -ѣ (∿e)，一方軟変化では -и がよく保たれている。-ŭ 変化型の語尾-у, -ю は不活動体名詞で前置詞в, наとの結合において見られる形だが，миръ は第一部で въ мирѣ，第二部で въ миръ となって現われる。домъ, чинъ の二語のみ前置詞Oと結合し，ѡ домꙋ, ѡ чинꙋ の形が第一部に見られる。

[Nn, pl] -o変化型硬変化では-ьが大勢を占める。本来の主格語尾-иはангели, ѣвси, диѧволи, дѣмони, орли, плоди の各語に現われ，いずれも宗教的内容に関連の深い語である。(орли は聖書の引用箇所) плодъ は第一部で плоди，第二部で плоды となっている。-ŭ 変化型では сынъ が古い主格語尾を保ている。主格語尾に -ове が用いられるのは他に жидове, вранове の二語，どちらも聖書の引用箇所において見られる。これ以外の変化型は全て－O変化型の語尾に同化している。-ĭ変化型の主格語尾 はわずかにтатие, мꙋжие に現われ，前者は第一部での用法，後者は64章での用例である。 тать には第二部にтати の複数主格形がある。

[Ng, pl] -овъ/-евъ, -∅, -ей の3通りの語尾が文献全体で存在する。古いŭ型の語尾

〔 表 2 〕

		-o変化型硬変化		-o 変化型軟変化	
Sg	Nn	плодъ	дрꙋгъ	покой	мꙋжь
	Ng	плода	[дрꙋга дрꙋгꙋ	Δпокоѧ	мꙋжа
	Nd	плодꙋ	дрꙋгꙋ	покою	[мꙋжꙋ мꙋжеви
	Na	плодъ	дрꙋга	Δпокой	Ngと同形
	Ni	Δплодомъ	Δдрꙋгомъ	Δпокоемъ	мꙋжемъ
	Nl	Δплодѣ	Δдоꙋзѣ	покой	мꙋжи
pl	Nn	[плоды плоди	дрꙋги	покои	[мꙋжи мꙋжие
	Ng	плодовь	Δдрꙋгъ	Δпокоевъ	мꙋжеи
	Nd	плодомъ	дрꙋгомъ	Δпокоемъ	мꙋжемъ
	Na	Δплоды	Ng又はNnと同形	Δпокои	
	Ni	плоды	Δдрꙋги	покои	мꙋжи
	Nl	плодѣхъ	Δдрꙋзѣхъ	Δпокоехъ	Δмꙋжѣхъ

-овъ/-евъ が－O型にも及び，全体に優勢である。本来の－O変化型語尾である-Øは宗教的内容に関連の深い語（грѣхъ，недꙋгъ，христиѧнъ），рабъ，болѧръ，слꙋгъ，человекъなど若干の人を表わす語，及び第二部にみられるалтынъ，воротъに用いられる。しかしгрѣхъ，недꙋгъは -овъ 語尾の形と共合しており，生格語尾の -овъ/-евъ への統合が進行しつつあった状況を物語っている。-i変化型の語尾-еи（<-ьи）は各部に若干例を見，гостеи，гꙋсеи，мышеи，родителеи，сꙋседеиなどいくつかの活動体名詞がこの語尾をとる。сꙋсѣдъは-еи と並んで-Ø語尾形も現われ，前者は第一部に，後者は第二部に属する。

[Nd，pl] -омъ，-емъが大部分を占める。本来－a変化型の語尾である-амъ，-ѧмъは第二部に数例(добыткамъ，залавкамъ，кꙋрамъ，хоромамъ)を見るが，これらの語尾がはいずれもアクセントのないものであるため，Соколовaは -омъのOがa化した結果現われた形とも考えられるとしている。(Соколова 前出書，стр．122)

[Na，pl] 活動体名詞の中で，гꙋси，пчелы，люди，гости，враги，кꙋры，слꙋги等が主格形と同形の対格として現われる。但し гости は про гостиの結合の中でのみ用いられている。また люди は主格同形の対格の用例4例のうち3例が前置詞との結合において用いられている。люди，гости ともに-ей語尾の形と共合している。слꙋгиも слꙋгъ という-Ø語尾の主格形と同形の対格形と共合，用例数では-Ø形の方が優っている。сынъではсынове（二主格と同形），сыновъ（二生格と同形），сыны

（－O変化型のアナロジー）の3通りの対格形がみられる。

[Ni, pl] -ами, -ями 語尾は第一部に一度（зубами），第二部に5回（ладамї, горамї 等），第64章に4回（домами, товарищами, 等）のみの用例がある。-ь変化型の語尾 -ьми は мечтань が唯一再現している。他は-ы, -и尾である。

[Nl, pl] -ѣхъ/-ехъ が圧倒的に多く，－O型軟変化にもこの形が用いられている。-ахъ, -яхъ 語尾は第一部で一度（дахъ），第二部で6回（гость, коробахъ, орескахъ, с седахъ など）用いられ，このうち гость と коробъ は-ѣхъ 語尾と共合している。

〔 表 3 〕

		－O型 中性名詞		子音変化型	
		硬変化	軟変化		
Sg	Nn	село	питие	имѧ	слово
	Ng	села	питиѧ	Δимени	слова
	Nd	Δселу	Δпитию	Δимени	словеси
	Na	Δсело	питие	имѧ	слово
	Ni	Δселомъ	питиемъ	именемъ	словомъ
	Nl	селѣ	[питие питии	(Δимени)	
Pl	Nn	села		Δимена	Δсловеса
	Ng	селъ		(Δименъ)	словесъ
	Nd	Δселомъ		(Δименемъ)	Δсловесемъ
	Na	Δсела		Δимена	словеса
	Ni	Δселы		имѧны	[славами словесы
	Nl	селехъ		Δименехъ	(Δсловесехъ)

＜表3＞中性名詞－O変化型及び子音変化型名詞について。

[Ng, Nd, Ni, sg] －O変化型名詞については特に注目すべき点はないように思われる。子音変化型名詞のうち слово は－O変化型と元来の変化型が混合したパラダイムを見せている。имѧ の [Ng] 及び [Nd] は времѧ の変化形から再現した。

[Nl, sg] －O変化型軟変化で-иに替わって-ěが用いられる例が第二部に目立つ。(въ питие, въ подворье)

[N, pl] 子音変化型は大よそ古い変化形を保っていると考えられる。但し слово の造格形に славами (=сло-) という－a変化型語尾のついた例が第一部にみられる。－O変化型は表に挙げたようなパラダイムをほぼ満たす。блюдо のみ主格で блюды と変則的な語尾で一度現われる（第二部）。

〔 表 4 〕

		女性 -a 型変化形		女性 -i 型	子音変化形
Sg	Nn	жена	землѧ	заповедь	мать
	Ng	жены	Δземли	заповеди	матери
	Nd	жене женѣ	Δземле	заповеди	матери матере
	Na	женꙋ	землю	заповедь	матерь мати
	Ni	женою	Δземлею	Δзаповедию	(Δматерью)
	Nl	[жене [женѣ	земли земле	заповеди	(Δматери)
Pl	Nn	жены	земли	Δзаповеди	Δматери
	Ng	женъ	земель	[Δзаповедеи [Δзаповедии	матереи
	Nd	женамъ	Δземлѧмъ	заповедемъ	матеремъ
	Na	[жены [женъ	земли	заповеди	Ng又はNnと同形
	Ni	женами	землѧми	заповедьми	
	Nl	Δженахъ	землѧхъ	заповедехъ	

<表4>女性名詞（およびごく少数の男性名詞）－a変化型，－i変化型，子音変化型，変化型について

[Nn, sg] －a変化型の主格形は動詞不定形の直接目的語として，対格のかわりに非常に頻繁に用いられる。特に第二部に多く80近い用例が数えられる。第一部，64章の順でこの用例は減少するが，これは述語としての不定形の使用度のと相関していると考えられる。

[Ng, sg] 古い変化形の名残りから ѿ всеѧ дꙋша (<-ѣ)の結合において дꙋша の生格形 дꙋшa が第一部に幾度か見られる。この他の生格形は各変化形とも-ы，-и尾をとる。(-ū 型も同様である。ЦРКВИ)

[Nd, sg] －a型では硬変化，軟変化ともに -e/-ѣ が優勢。-и語尾は各部に若干例みられるが，-eと共合している場合が多い (земли∿земле, кꙋпли-кꙋпле, кровли∿кровле)。мать においてはматери と матере の2通りの形がみられる。

3.3 以上表1－4が＜D＞の名詞の変化形のパラダイムの再構成である。全体に単数のカテゴリーよりは複数のカテゴリーが，また主一対格よりは斜格において，より古い変化形が残されていることがわかる。また第一部と64章にはより古い要素が多く保たれているが，単数カテゴリーの各変化形からわかるように伝統的な変化型の規則から逸脱している場合も少くない。第二部には現代語と一致する変化形が現われはじめていることも興味深い点である。